

## 今治歴史散歩

大成経凡

今治の埋もれた、魅力ある歴史文化を紹介するコーナーです。第36回は、国分地区にある新田一族・脇屋義助<sup>れいびょう</sup>の霊廟と、義助ゆかりの国分神社が創設された背景を歴史散歩したいと思います。

### 第36回 脇屋義助霊廟と幻の国分神社

#### ●南朝の忠臣・脇屋義助

1342年、世田城（世田山～笠松山）を舞台に今治でも南北朝合戦の熾烈な戦いがありました。軍記物語『太平記』などによると、その年の4月下旬、南朝の勢力挽回を託され、西国方面の大將として脇屋（<sup>わきや</sup> 刑部卿）義助が今張浦に上陸し、伊予国府へ入りました。義助は、鎌倉幕府倒幕で軍功を立てた新田義貞の弟で、1338年の兄の戦死以降も南朝勢として転戦していました。しかし、今治着任早々の5月中旬に病気で亡くなるのです。

その間隙を突いて北朝の細川頼春軍が讃岐から伊予へと攻め入り、東予各地で勝利を重ね、最後は南朝の残党が籠る世田城を大軍で包囲します。ここで南朝の伊予国守護・大館<sup>おほ</sup>氏明が自刃し、首実検が東村の真光寺で行われたようです。また、篠塚伊賀守は敵の包囲網を突破して、今張浦から船で逃亡したという武勇伝も残されています。

#### ●今治藩による顕彰活動

江戸時代の1668年、今治藩初代・松平定房<sup>さだふさ</sup>が江戸で召し抱えた浪人に江嶋<sup>たのぶ</sup>為信がいました。為信は文学・兵学の才能に秀で、2代・3代藩主にも仕えて家老にまで出世します。為信は今治へ入国するや、義助の墓の存在を知り、国分村を訪ねています。国分寺で住人に訊くと、「そのような名前は聞いたことないが、シンデングスケの塚なら東の丘にある」と答えたそうです。

翌年、為信は国分寺住職らと諮<sup>はか</sup>って、現在の墓石を建立しました。また、江戸後期の1829年には藩の儒臣・佐伯惟忠<sup>これただ</sup>が高名な儒学者・貝原益軒<sup>かいばらえきけん</sup>の賛文「脇屋卿賛」を刻む石碑を墓所に建立するなど、侍の鑑<sup>かがみ</sup>として朝廷の忠臣を讃えたのでした。



脇屋義助霊廟（今治市国分）



脇屋義助の墓

## ●四国霊場ブームと脇屋廟

真念<sup>しんねん</sup>が四国遍路ガイド本の嚆矢<sup>こうし</sup>となる『四国遍路道指南<sup>みちしるべ</sup>』を出版したのが1687年のことでした。同著には、義助の墓所の情報が記され、以降のガイド本にも踏襲されていきます。墓<sup>びよう</sup>（廟）の管理は国分寺が担い、新田堂という庵寺を近くに設けていました。また、義助の子孫を称する脇屋次郎こと柏木甲介という人物から墓の譲渡や維持費提供の申し入れがあったようです。

この庵寺は、半井梧菴<sup>なからいごあん</sup>が編纂した伊予国地誌『愛媛面影<sup>えひめのおもかげ</sup>』などにも描かれていて、義助の死因が「瘡<sup>おこり</sup>」（マラリアのような熱病）であったと記されているのです。地元では、瘡の感染者が墓に祈願すれば平癒<sup>へいゆ</sup>するという信仰があったようです。国分寺はその霊験<sup>れいげん</sup>にあやかり、新田堂を管理することで、札所の参詣者を増やそうとしたのでしょう。

## ●国分神社の消長と脇屋会の創設

明治維新を迎えると神仏分離が図られ、神道と仏教の明確な区別がなされました。これによって新田堂は廃止され、墓（廟）の管理が途絶えます。一方、明治元（1868）年に今治藩主・松平定法<sup>さだのり</sup>は旧姓の久松姓に復して反佐幕派の態度を鮮明にし、戊申戦争では新政府軍として会津に兵を派遣しています。明治2年の版籍奉還では、全国260余藩にあって13番目に申し出を行うなど、時流にとっても敏感でした。

そうした中、明治3年に藩は古国分村谷ノ口境の山上へ国分神社を創設し、義助<sup>みたま</sup>の御霊を墓所から勧請する招魂祭<sup>しょうこんさい</sup>を執行了しました。しかし、廃藩置県で翌4年に久松侯が去り、同7年の暴風雨で神殿が倒壊すると、復旧費用に窮してしまうのでした。同社は郷社の綱敷天満宮（古天神）末社のため、他の南朝の忠臣同様に官幣社<sup>かんべいしゃ</sup>に昇格させることで官費による再建・修理を願ったのでした。明治16年に義助<sup>じゆきん</sup>は従三位の官位<sup>ついでう</sup>を追贈されますが、その後の神社の経過はよく分からず、同20（1887）年に新調した太鼓が国分春日神社に残されています。

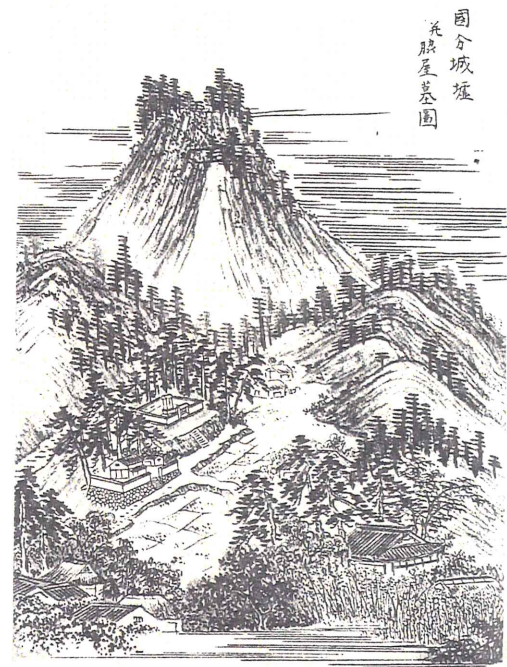
大きな転機は明治34（1901）年に訪れます。国分寺住職・中野堅照<sup>けんしょう</sup>が檀家総代の加藤徹太郎と協議して「脇屋会」を創設しました。多数会員後援のもと、義助の命日の5月11日に慰霊法会<sup>いれいほうえ</sup>を行うというものでした。そして明治41・42年頃に村内の神社整理が行われた際、国分神社は村社の春日神社<sup>こうし</sup>に合祀されることになりました。

現在の脇屋卿霊廟の総櫓造りの拜殿は大正5（1916）年に建立され、昭和16（1941）年には没後六百年祭が執行されています。昭和戦前の法会には、義助の子孫（同族）らも参集し、地元住民の参詣や奉納競馬もあって賑やかだったようです。

新田氏発祥の地が群馬県太田市であることから、平成11（1999）年に今治市で開催された南北朝歴史サミットを機に、今治市と太田市は同14（2002）年4月に姉妹都市提携を結んだ。



国分神社の太鼓（春日神社所蔵）



『伊予国地理図誌』に描かれた脇屋義助の墓